

「まあ」の意味と機能

— 出現条件から考える —

柳澤 浩哉・馮 文彦¹

(2021年10月5日受理)

The Meaning and Function of “Ma”
— Focusing on its appearance condition —

Hiroya Yanagisawa and Hyou Bungen

Abstract: “Ma” is a word that often appears in Japanese conversation, but it is difficult to clarify its meaning and function. We have collected 259 “ma” examples from natural Japanese conversation, but the meaning or function of most of them cannot be described. Therefore, we thought that it was impossible to directly grasp the meaning and function of “ma”, that the only way to understand “ma” is to clarify the conditions that can exist in a conversation. And we expected the condition as follows: “ma” can appear when a speaker feels superiority. We verified the effectiveness of this hypothesis on the condition from two directions. One direction is effectiveness for usage, we showed that the hypothesis can explain the various usage of “ma”. The other is quantitative verification using examples of natural conversation. Based on these considerations, this paper draws the following conclusion. (A) “Ma” is the word that has no meaning and only the appearance condition. (B) Feeling superiority is the condition for the appearance of “ma”.

Key words: “Ma”, filler, Japanese conversation, appearance hypothesis

キーワード: 「まあ」、フィラー、日本語会話、出現条件

1 はじめに

「まあ」は日本語会話に頻繁に現れる語であるが、その意味や機能は難解である。はじめに二つのことを断っておきたい。まず、本稿では「まあ」と短縮形「ま」を区別しない。そのため、原則として「まあ」を〈『まあ』または『ま』〉の意味で使用する(例文の説明は除く)。もう一つは考察の対象範囲である。「まあ」の中には2モーラで上昇する形があるが、本稿ではこれを京阪神等に見られる方言と考えて考察対象に含めない。事実、筆者が収集した自然会話(名古屋市で収録)と大学講義(東広島市で収録)には、この「まあ」が

一例も存在しなかった。

語の意味を考える場合、複数の用例から共通する意味を抽出していくのが一般的な方法である。だが、「まあ」についてはこの方法が使えない。自然会話の用例の中に意味を確定できる「まあ」がほとんど存在しないためである。筆者は「まあ」を捉えるために、自然会話に出現した「まあ」(259例)と、補助的な用例として大学講義に出現した「まあ」(458例)を収集した。⁽¹⁾しかし、その中で意味や機能を迷いなく確定できたのは、「まあ、そうだね。」「まあね。」のような相槌だけで(自然会話に15例、講義は0)、それ以外は意味や機能を殆ど確定できなかった。ちなみに、「まあ」の意味として母語話者は曖昧性を考えるが、曖昧性の意味を持つと判断できた用例は会話の中に0例から8

¹広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

例見られるだけである（判断が難しいため幅を持たせざるを得ない。相植は含めない）。

あるいは、筆者は何人かの母語話者に次の質問を試みたことがある。会話中に相手が「まあ」を発した瞬間、会話を中断して「まあ」を発した意図を尋ねるといふ質問である。そこで分かったことは、「まあ」の多くが自覚なしに発せられている事実である。他のフィラーと比べて、「まあ」は自覚されない傾向がかなり高いように思える。

用例の殆どについて意味や機能の確定が困難であり、さらに無自覚に発せられることが多い。このような特徴を持つ「まあ」を捉えるには、特別な方法を考えなくてはならないが、その前に確認しておくべきことがある。「まあ」の意味を考える場合、母語話者の直感が邪魔をすることがある。次章ではこの問題を考える。

2 近似値性は「まあ」の中心的意味ではない

母語話者が「まあ」の意味を考えると「だいたい」あるいは「とりあえず」といった意味が浮かぶと思う。国語辞典にもこの意味が必ず記載されている。「十分ではないが、とりあえずは満足できる気持ちを表す。」（『明鏡国語辞典』）。「他のことも考えられるが、とりあえずそうしようという気持ちを込めて、ある行為を指し示す語。」（『日本国語大辞典』）。母語話者が直感的に思い浮かべるこのような意味を、本稿では近似値性と呼ぶことにしたい。「まあ」については複数の先行研究がある。多くが「まあ」の意味を考察しており、いずれも近似値性を元にした意味を提案している。代表的な仮説として「曖昧性」、「ヘッジ」、「わだかまり」、「暫定性」といったものがある。簡単に説明したい。

曖昧性は富樫（2002）が提案している。⁽²⁾

(1) 1980円に消費税だから、まあ、2100円くらいかな。富樫（2002）はこのような例文をあげて曖昧性を次のように説明している。「ある前提から結果へと至る計算処理過程が曖昧であることを示す、あるいは計算に至る際の前提そのものが明確ではないことを示す」。

川田（2007）は、「まあ」をヘッジ、フィラー、情動的感動詞の三つに区別し、その中で「緩和表現もしくはヘッジとして機能する『まあ』」の例文として次をあげている。⁽³⁾

(2) A：太郎は賢いよね。

B：まあ、そうだね。

ヘッジの「まあ」は「必ずしも賢いとは限らない」という消極的な評価を表すと述べている。

小出（2007）は「まあ」の用法を「注釈」、「例示」、「見解」、「引用」などに分け、いずれの用法にも暫定性の意味が共通すると述べる。⁽⁴⁾「いくつかの選択肢の中から、厳密な検討を経ることなく、とりあえず選択されたもの」これが暫定性についての説明である。

わだかまりは大工原（2010）が主張している。⁽⁵⁾

(3) 日本でリングوといったら、まあ青森ですよ。

大工原（2002）は、この「まあ」が内心のわだかまり（「細かいことを言えば、長野や岩手などの他のリングの名産地もあるけど」）をほのめかすと述べる。

いずれの説も、「まあ」に対して直観的に感じる近似値性を元にしてしているため納得しやすいが、近似値性は「まあ」の中心的意味ではないと考えられる。

(4) まあ、そうしてください。

(5) まあ、分かりました。

どちらも完全な承認・了解ではないので、近似値性が認められる文と考えていいだろう。この二つの文は使用者に制限がある。社会的に上位の者が下位の者に向かって言うには問題ないが、下位の者が上位の者に対して発すると偉そうな印象・不満そうな印象が生まれてしまい（下位→上位）の方向にはまず使えない。例えば、平社員が課長や部長にこれを言う場面を想像できるだろうか。この事実、近似値性より強力なルールまたは意味が存在する可能性を示唆する。

このように書くと、「まあ」がぞんざいな印象を作るために下位の者が使いにくいだけだ」と考える読者がいるかもしれない。だが、例えば（6）の「まあ」なら（下位→上位）の方向で使っても違和感はないと思われる。上位者から祖母の思い出を聞かれた時の返事だと思っただけだ。

(6) まあ、祖母のことはあまり記憶がなくて。

近似値性にとってはさらに都合の悪い現象がある。「まあ」は正確な情報と共起してしまう。暫定性を提案した小出（2007）は、末尾の注で「説明のつかない例」として次を掲載している。⁽⁶⁾

(7) a. えー、答えは、まあ、17346です。

b. えー、今回の実験に要した時間は、まあ、1分33秒でした。

筆者が収集した中にも例えば次のような例文がある。これは大学講義（ドイツ史）に現れた例である。

(8) で、まあ当然、え高校で世界史を取った人は知っているものだろうと思いますけれども、ま1871年という年にドイツはですぬ初めて国家統一をやります。

「ま1871年」の「ま」はもちろんだが、「まあ当然」の「まあ」も近似値性では説明できない。

筆者が収集した自然会話（大学講義を含む）の用例

には、確かさや確信を感じさせる、すなわち近似値性と無縁と思われる「まあ」を多数発見できる。そのような例をいくつかあげてみたい。次は講義の例である。

(9) その中でまあ、パラグラフの3要素をどういうふうに一、ま読者になんですね、分かりやすく書くか。

ここでの「まあ」と「ま」には後続要素を強調する気持ちが感じられ、そこに近似値性は感じられない。

次の例は大学生と大学教師の会話であり、教師が学生に向かって自分の研究の話をしている。(Sが学生、Tが教師)

(10) S：今こちらで勤務されててその間も何か研究を続けて。

T：それはそうです。そうです。もちろん。

S：同じその文学の、

T：そうですね。文学ですね、まあ一生続くんだと思いますよ。

下線部で教師は研究への熱意を語っており、「まあ一生続く」は、〈とりあえず一生続く〉ではなく〈死ぬまで続く〉というストレートで強い気持ちだろう。研究に対する熱意は、点線を付した「それはそうです、そうです、もちろん。」にも感じる事ができる。

次は学生どうしの会話の例である。Aは自分が参加した日本語教室の話をしている。

(11) A：で、まあ10課の一日目にそれを練習する。

B：うんー。

A：で、10課の二日目に(笑)「いきました」とかを練習する。

この会話では、Aが自分の体験を具体的に語っており「まあ」に続く「10課の一日目」に「とりあえず」や「だいたい」といったものは感じられない。収集した自然会話の「まあ」には確かさを感じさせるこのような例が少なくない。

この章をまとめてみたい。母語話者は「まあ」の意味として近似値性を思い浮かべるが、近似値性が「まあ」の中心的意味でないことを複数の現象が示している。一つは、近似値性よりも優位な意味または規則が想定されること。もう一つは、「まあ」が正確なデータと共存できること。ただし、それ以上に重要なのは、自然会話では近似値性の「まあ」が殆ど見られず、近似値性を感じさせない「まあ」が多数存在する事実だろう。では、近似値性がなぜ真っ先に頭に浮かぶのか。その理由は本稿の最後に検討してみたい。

3 「まあ」を捉える方法

「まあ」を捉える方法としてまず考えられるのは、

自然会話の用例に注目することだろう。筆者は自然会話の「まあ」の出現場所を文脈と文法の両方から整理し、出現しやすいいくつかの場所を見出した。文脈的には、自信のある場所(会話の流れと強調する言葉の存在等から判断した)、体験を踏まえた発言、自分を語る発言、話の流れを変える発言、補足説明など。文法面では、逆接の前後、挿入節などである。筆者は当初この事実に注目し、出現しやすい場所の共通性から「まあ」の機能を捉えようとしたが、この試みはうまくいかなかった。出現しやすい場所に共通性が見出せないこともあるが、出現しやすい場所が「まあ」の何を示すのかという、肝心なことが明らかにならなかったからである。

意味も機能も確定できず出現場所にも共通性を見出せないとすれば、さらに別の何かを手掛かりにしなくてはならない。その何かは、多くの「まあ」に適用できて、比較的明確に境界線を引けるものでなくてはならない。それを見つけるのは簡単ではないが、「まあ」にはこの候補になりそうなものがある。それは、「まあ」を〈使える/使えない〉を決定する条件である。

例えば前章において、〈上→下〉の方向では問題ないが〈下→上〉の方向では使えない「まあ」のあることを確認した。「まあ」の使用が社会的な上位・下位によって制限されることは、「まあ」に広く適応でき、さらに比較的明確に判断できる。本稿ではこのような条件を「まあ」の出現条件と呼ぶことにしたい。この場合は、〈「まあ」は上位の者に対して使いにくい〉が出現条件になる。そして、「まあ」にはこれ以外にも出現条件があるので、これを手掛かりに「まあ」の意味と機能を捉えてみたい。

本稿の今後の作業は次のようになる。

- ① 「まあ」の出現条件を3つの仮説で示す。
- ② 仮説を一本化し「まあ」の出現仮説として提示する。
- ③ 「まあ」の主な用法を出現仮説から説明する。
- ④ 仮説の妥当性を自然会話から量的に検証する。
- ⑤ 「まあ」の意味を考え、出現仮説の意味を考える。

4 「まあ」の出現条件(1) 社会的条件

「まあ」の出現条件としてまずあがるのは、前章で述べた〈「まあ」は上位の者に対して使いにくい〉である。この出現条件を収集した自然会話で確認してみたい。学生と教師の会話に出現した「まあ」の数はそれぞれ次のようになる(9組(約135分)の合計数)。

教師：163 学生：29

教師の「まあ」は学生の5倍を超えている。

さらに、「まあ」が謙譲語と強く衝突する現象は、この条件から生まれると考えられる。

(12) ×まあ、説明させていただきます。

(13) ×まあ、行ってまいります。

(14) ×まあ、了解いたしました。

これらを実際に発することはないだろうが、もしも発すると〈謙虚な気持ちは全くないのに無理して謙譲語を使っている〉という印象を与えるのではないか。謙譲語よりも「まあ」が強い印象を残すため、〈謙虚な気持ちはあるのに「まあ」と言ってしまった〉とはならない。なお、「まあ」と謙譲語の衝突は、「まあ」の近似値性によって生まれると考える読者がいるかもしれないが、暫定性や曖昧性が謙譲語と衝突しないことから、その可能性は極めて低いと言える。(15)は暫定性、(16)は曖昧性の意味を持つ語を謙譲語と組み合わせている。

(15) とりあえず、説明させていただきます。

(16) ほぼ了解いたしました。

5 「まあ」の出現条件(2) 体験語り

先ほど、学生と教師の会話において「まあ」の出現数に5倍以上の開きのあることを述べたが、よく考えるとこの結果には矛盾が含まれている。〈「まあ」は上位の者に対して使いにくい〉という出現条件に違反して29回も学生が「まあ」を使っているからである。念のために会話資料について確認しておきたい。会話は大学生と大学教師の1対1、互いに初対面、約15分の会話9本である。したがって、気が緩んだ、親しみを感じて使ったという理由は考えにくい。一つの可能性として、上下関係とは異なる出現条件の存在が考えられる。新たな出現条件は上下関係よりも優位にあり、それによって教師に対する「まあ」が可能になったという可能性である。

学生が教師に向けて発した「まあ」を調べてみると興味深い事実が分かる。学生が発した29回の「まあ」の内11回(37.9%)が自分の体験を語る中で出現している。その例をあげてみたい。

(17) S: うんー。僕も夏一回、けんしゅ、大学のプログラムの研修で一月北京に、

T: ああそうですね。

S: まあ短期留学する機会があったんですけど。実際行ってみて、あの、何て言うんですかね。

(18) S: ええ。でー、まあ今専門中国語をやらせてもらっているんですけど、ゆくゆくはその中国語を使って、父親、あのーそういう系の仕事に就いてますんで。

T: あーそうですね。

このように自分の体験を語る発話を体験語りと呼ぶことにしたい。なお、体験語りに準ずるものとして学生が自分の将来を語る発話があり、この中に3例の「まあ」がある。ただし、将来についての語りは他の発話との区別が難しいため、本稿では体験語りだけをカウントした。他の会話の体験語りについても見てみよう。体験語りに「まあ」が多く現れるのは学生だけではない。教師が学生との会話で発した163回の「まあ」の内56回(34.4%)、友人どうしの会話では全体67回の内12回(17.9%)。これらの事実から、〈「まあ」は体験語りに現れやすい〉を出現条件としてみたい。⁽⁷⁾

6 「まあ」の出現条件(3) 発言前提の優越性

出現条件にはさらに別のものが考えられる。次は曖昧性の例文である。

(1) 1980円に消費税だから、まあ、2100円くらいかな。

「まあ」にふさわしい例文であるが、ここで「まあ」を使えるのは最初に予想を言う者だけである。複数の人が金額を予想した場合、二番目以降の発話では「まあ」を使えない。次はAとBの会話で、Aの発言を覆す予想をBが提示している。

(19) A: 1980円に消費税だから、まあ、2100円くらいかな。

B: ? まあ、俺の計算では2200円くらいだ。

Bの発言が「いや」で始めれば自然だが「まあ」では不自然になる。反論で「まあ」が使えないことは、曖昧性以外の会話でも見られるので類例をあげてみる。

メタな視点からの発言には「まあ」がしばしば見られる。

(20) まあ、出世を考えるなら、そんなことは言わないことだ。

これは相手の言葉をたしなめる発言で、メタな視点からの意見になっている。(20)にBが次のように反論したとしよう。二人の発言を並べてみる。

(21) A: まあ、出世を考えるなら、そんなことは言わないことだ。

B: ? まあ、出世したいからこそ、あえて言うんだ。

Bの「まあ」の判断はやや微妙かもしれないが、母語話者10名にアンケート調査をしたところ、10名中8名が「不自然」「やや不自然」を選んでいる。⁽⁸⁾あるいは、これまでの話が冗談だったことを明かす時には、次のセリフが慣用句のようにになっている。

(22) まあ、冗談だけど。

ただし、冗談であることに聞き手が先に気づいてしまうと、「まあ」は付けられなくなる。

(23) そう、冗談だよ。

例えばこのようになるだろう。

ここまでは発言の順番がポイントだった。そこから、〈最初の発言〉あるいは〈先に気づいたこと〉が出現条件になりそうだが、「まあ」の出現を決めるのは発言の順番ではない。(20)に対するBの反論が次のようになれば、反論であっても「まあ」の許容度が高くなる。

(24) A：まあ、出世を考えるなら、そんなことは言わないことだ。

B：まあ、出世が全てのお前には分からんよ。母語話者のアンケートでは、(24)に対して10名中6名が「自然」「やや自然」を選んでいる。(21)と(24)では何が違うのだろう。(21)では「出世を考えるなら」に対して「出世したいからこそ」と答えている。Bの反論は〈出世が大事〉というAと同じ前提・同じ基盤に立っている。これに対し、(24)のBは「出世が全てのお前には分からんよ」とAの価値基準を相対化し、Aとは異なる価値観であると主張している。Bの「まあ」を可能にしているのは、相手とは違う価値観を持ち、異なる価値観に自信を持っていることではないか。これを別の例文で確認してみよう。(25)の状況を説明したい。AとBの二人が登山道を歩いている。そして、遠くの「黒い塊」に気づいたAが次のように言う。

(25) A：おい、向こうに見える黒い塊は熊じゃないか。この時、Bは少し距離をとって歩いており、Aより「黒い塊」がよく見る場所にいたので次のように反論する。
(26) A：おい、向こうに見える黒い塊は熊じゃないか。

B：? まあ、あれはどう見ても鹿だ。Bの発言が「いや」で始まれば自然だが「まあ」には違和感がある。Bは相手より良く見える位置にいて、実際良く見えているが「まあ」は使えない。反論において、自分の判断に自信がある、自分の方が良く見えるといった自負があっても「まあ」を使えないことが確認できる。これに対して、Bが異なる関心に立っていれば次の会話のように「まあ」が可能になる。

(27) A：おい、向こうに見える黒い塊は熊じゃないか。
B：まあ、熊でも鹿でもいいから、急がないと夜になるぞ。

Bは〈到着時間〉という緊急性の高いものに意識があり、Aの関心事である〈黒い塊の正体〉には興味がない。(24)と同様、発言の前提に違いがある。

本章の考察をまとめてみよう。反論において「まあ」が使えるか否かを手掛かりに、「まあ」の新たな出現

条件を考えてきた。反論では「まあ」を使えない場合が多いが、特別な条件が満たされると「まあ」が使える。相手の発言と反論の間に大きな差のあることがその条件だが、それは自信の強さ・見え方の違いといった程度の差ではなく、価値観、興味関心の対象、意識を向ける対象といった思考の前提に差がある場合である。第三の出現条件を次のようにまとめてみたい。〈発想の前提に優位性があると「まあ」が出現できる〉。

7 出現条件の集約

ここまでに提案した出現条件を(A)(B)(C)を付けて並べてみよう。

(A)「まあ」は上位者に対して使いにくい

(B)「まあ」は体験語りに現れやすい

(C)発想の前提に優位性があると「まあ」が出現できる

3つの条件はバラバラのように見えるが、よく見ると一つの共通性が隠れていることに気づく。まず、上位者は相手に対する社会的優位性を前提に会話ができる。次に、体験語りは自分しか知らないことを語る行為なので、発言を支える情報に絶対的な優位性がある。そして、「発想の前提」における優位性は、会話の中で思考によって得られた優位性である。つまり、(A)(B)(C)は話者の優位性を、社会的優位性、情報の優位性、思考による優位性という3つの角度から捉え、それぞれの形で表現した命題だったのである。ならば、3つの仮説は一本化できるのではないか。最もシンプルな形にまとめると(28)になるだろう。優位性が得られる方法には(A)(B)(C)以外の可能性もあり得るので、(28)は(A)(B)(C)の和とはならないが、シンプルで適応範囲が広いことから(28)には「まあ」を把握する仮説としての可能性が感じられる。

(28)「まあ」は優位性を感じた時に出現できる。

ただし、ここでの「優位性」には検討の余地がある。社会的上位者の優位性は容易に崩れないもので、体験語りに関する情報の優位性も絶対的なものである。また、「発想の前提」における優越性は、思考の基盤となる深い部分の優位性である。いずれも簡単には越えられない・崩されない優位性という点が共通している。このニュアンスを表現するために、出現仮説では優位性ではなく優越性という言葉を使ってみよう。先ほどの仮説は次のようになる。

(29)「まあ」は優越性を感じた時に出現できる。

これを「まあ」の出現仮説と呼ぶことにしたい。繰り返しになるが、優越性はそれを得た方向から、社会的関係によるもの、情報によるもの、会話の中で思考に

よって得られるものの3つに分けられる。以下では、紙幅の許す限りこの出現仮説の有効性を検証したい。

8 仮説の有効性(1) 自然会話での出現数

まず、出現仮説が収集用例の全体数と合致することを報告したい。筆者が収集した自然会話と大学講義における「まあ」の出現総数は次の通りである。

学生と教師の会話	教師：163 学生：29
学生どうしの会話	総数：67 (9本, 合計約135分)
大学講義	総数：458 (90分授業×6, 合計約540分)

6講義の「まあ」の数はそれぞれ以下である。

：8, 176, 102, 90, 20, 62

比較のために、1分あたりの平均出現回数を計算すると次のようになる。

学生と教師の会話	学生0.22 教師1.20
学生どうしの会話	学生一人あたり0.25
大学講義	0.85

(最も出現数の多い講義176回 1.96)

学生と話す教師は「まあ」を学生の5倍以上発しており、大学講義における「まあ」の出現頻度も学生を大きく上回っている。ただし、大学講義では「まあ」の数が一定でなく、90分講義の中で最少8回、最多176回と大きな開きがある。この理由について考えておきたい。大学講義における教師は、社会的属性だけでなく知識量・理解度などで学生を圧倒しており、教師の優越性は二重三重に満たされている。その一方で、公的な講義では口語的な「まあ」を避けようとする意識も働くため、大学講義は「まあ」の促進要素と抑制要素の両方が働く場と言える。大学講義において「まあ」の出現回数に大きな開きがあるのは、口語的な言葉を避けるようとする抑制意識の強弱によると考えられる。

9 仮説の有効性(2) 感動詞的用法、なだめ

ここから11章までは、「まあ」の様々な用法が出現仮説で説明できることを確認していきたい。まず、感動詞用法から検討してみよう。感動詞用法とは次のようなものである。なお最初に述べた通り、2モーラで上昇する「まあ」は本稿の対象外である。

(30) まあ、すごい。

(31) まあ、綺麗。

感動詞用法は使用者に制限があり、年長の上品な女性が典型的な使用者となる。さらに、感動詞用法では使

用者だけでなく対象にも制限がある。

(30) まあ、すごい。

これによって称賛できる人物は幼児か子供にはほぼ限定される。成人に対して(30)を使うと、相手を子ども扱いしたような違和感が生じる。別の例をあげてみる。

(31) まあ、綺麗。

(31)が人に対して使われる場合、賞賛の対象は幼児・子供よりは広がるもののやはり制限がある。成人に対して使う場合、賞賛できるのはある程度身近な人物で、さらに年齢が自分と同じか年下に限定されるだろう。⁽⁹⁾一方、(31)は人物以外を賞賛することもできるが、その場合にもやはり制限がある。大自然の息をのむ美しさに圧倒された時、その感動を伝える言葉として(31)はふさわしいだろうか。その時の言葉は「まあ」を付けない「綺麗・・・」のようになるだろう。あるいは、巨大なダイヤモンドの輝きに魅入られた時にも、「まあ」を付けた(31)は不自然である。巨大なダイヤモンドを見ながら(31)が言える人がいるとすれば、そのダイヤモンドに驚かない人、そのような宝石に慣れている人となるだろう。

感動詞用法におけるこれらの制限は、出現仮説によって説明できる。話者の優越性を脅かさないために、これらの制限が生まれると説明できるからである。すなわち、〈どんなに「すごい」でも自分を越えない〉ために「すごい」の対象は幼児か子供になり、〈どんなに「綺麗」でも自分を脅かさない〉ために「綺麗」の対象となる人は自分と同等か下位の者、あるいは「綺麗」の対象となる感動は自分の経験を超えない感動になる。さらに、感動詞用法の使用者制限も同じ原理で説明できる。〈自分の優越性を脅かさない賞賛〉という行為はある種の矛盾を含むために演技性が高くなる。そのような言動が許されるのは、年長の上品な女性かそれに類似した人々に限られるからである。感動詞用法は驚きや感動を強めるのではなく、優越性を維持しながら驚きや感動を伝える用法なのである。

さらに、なだめの「まあ」と呼ばれる用法も出現仮説で説明できる。

(32) 落ち着いて。

(33) まあ、落ち着いて。

二つの例文を比較すると、「まあ」のある(33)の方に話者の余裕が感じられる。そして、その余裕は見通しの有無に行き着くと思われる。「まあ」のない(32)は〈落ち着かせる〉ことだけを考えているが、「まあ」のある(33)には、前後の事情を理解した上で落ち着かせようとしている感じがある。例えば、〈怒りたい気持ちは分かるが〉あるいは〈落ち着かないとマズイから〉そんな含みである。この含意は「まあ」の優越

性が〈相手に見えないものが見えている〉という含意を作るためと説明できる。別の例文でも考えてみよう。(34) そう言わずに。

(35) まあ、そう言わずに。

この場合も「まあ」があると事情が分かっているという感じがする。例えば、〈気持ちは分かるが〉あるいは〈その態度はマズイから〉といった含意である。なだめの「まあ」のメカニズムを図式化すると次のようになるだろう。

優越性がある → 情報がある・前提が見える

→ 相手の気持ちが分かる・先が読める

10 仮説の有効性(3) いろいろな含意

「まあ」によって生まれる様々な含意と出現仮説の関係を考えてみたい。下の二つの例文の内、弱みを握っていることを匂わせて相手を威圧するセリフはどちらだろうか。

(36) お互い大人ですから。

(37) まあ、お互い大人ですから。

どちらも威圧するセリフになり得るが、威圧感が強いのは「まあ」のある(37)の方だろう。「まあ」のない(36)は純粋な励ましにもなるが、「まあ」があると言外の含意を感じてしまいストレートな励ましにはならない。情報の優越性が〈あなたの事をよく知っている〉という含意を作るためと考えられる。たくさんの情報を持っているのに肝心なことを言わないことで、ある種の不気味さが生まれる。これはレトリックで抑言法と呼ばれる技法と重なる。大工原(2010)のわだかまりはこのメカニズムで説明できるだろう。

次に比喩的な意味を作る「まあ」を考えてみたい。

(38) 社長は学者だから。

(39) 社長はまあ、学者だから。

「まあ」がない(38)は意味が分かり難いが、「まあ」があると「学者」は〈学者のようだ〉という比喩的な意味だと理解できる。情報の優越性によって、〈社長の性格を熟知した上で、「社長」と「学者」というつながりにくい語を取ってつなげている〉ことが伝わる。その結果、「学者」が意味深であり〈比喩として使っている〉という解釈が生まれると説明できる。

ここまでマイナスとなる例をあげてきたが、「まあ」がプラスの含意を作ることもある。

(40) 俺に任せて。

(41) まあ、俺に任せて。

「まあ」のある(41)の方が自信がありそうに感じる。事情をよく知った上で「俺に任せて」と言っている方が、事情が分からずに「俺に任せて」と言う男より信

頼できるからだろう。

次は社会的優越性の例である。(42)と(43)は予算オーバーの請求書を見せられた経理担当者のセリフだと考えていただきたい。超過金額が大きいのはどちらだろうか。

(42) これくらいなら、いいでしょう。

(43) まあ、これくらいなら、いいでしょう。

超過が大きいのは「まあ」のある(43)の方だろう。「まあ」によって自分の社会的優越性を取って伝えることで、自分の優位な立場(金額を判断できる立場)を強調し、それを利用して〈大目に見た〉ことを暗示するためと説明できる。

11 仮説の有効性(4) 相槌と近似値性

相槌と近似値性について考えてみたい。まず、相槌の「まあ」が評価を下げる仕組みを考えてみよう。

(44) まあ、そうだね。

ここでは、話者が自分の優越性を宣言した上で肯定的評価を示している。最初の「まあ」で話者は優越者となり、「そうだね」という肯定的評価に〈自分には分かってた〉あるいは〈細かいところに目をつぶって甘く判断している〉といった含意が加わると考えられる。含意が評価を下げる方向だけになるのは話者の優越性を維持するためだろう。「まあね。」だけでも相槌となるが、この場合は自分の優越性を言うだけなので次のように自慢になることが多い。

(45) A: 英語の発音、きれいだね。

B: まあね。

次に近似値性について考えてみたい。〈だいたい〉〈とりあえず〉〈十分ではないが〉と説明される意味を本稿では近似値性と呼んでいる。次の文で考えてみよう。

(46) それは2000円だ。

(47) それは、まあ、2000円だ。

「まあ」のない(46)は考えずに値段を出した感じがするが、「まあ」があると〈考えた上で値段を出した〉あるいは〈迷いながら値段を出した〉という感じがする。情報の優越性が、いろいろな情報を勘案した上で判断したと感じさせるためだろう。だが、(47)の「まあ」はそれ以上に、〈十分な結論ではないが〉〈だいたい〉といった近似値性の印象を作る。優越性とは正反対に思える含意である。

(48) それは、まあ、2000円くらいかな。

「まあ」の含意は(47)と同じであるが、文末が断定でなく「くらいかな」という予想になっているため、近似値性との相性はさらに良くなっている。

これまでの用法では、いずれも「まあ」が優越性の

含みをストレートに発していたが、近似値性に限って正反対の含意が生まれる。どのようなプロセスで正反対の含みが生まれるのか。その原因は、結論が単純過ぎることにあると筆者は考えている。「2000円だ」「2000円くらい」という結論は、いろいろな情報を駆使して考えるには少々単純過ぎて「まあ」との釣り合いが取れない。そのため、〈いろいろ考えたはずなのに結論が簡単すぎる〉といった印象が生まれる。ここから〈最終的な結論は別のところにある〉あるいは〈とりあえずの結論だ〉といった屈折した含みが生まれてくるのではないか。

「まあ」と思考内容のバランスについて考えてみよう。〈まあ+だろう〉という組み合わせは〈だいたい〉〈とりあえずの〉という近似値性の含みを作りやすいが、常にそうなるとは限らず、優越性本来の含意を作ることもある。次の文は古い日本画を見た時の言葉だと考えて欲しい。この「まあ」に〈とりあえず〉といった含みを感じるだろうか。

(49) 狩野派であることには間違いないが、まあ、幕末か明治の作品だろう。

文末が「だろう」になっているが、(49)の「まあ」に〈十分ではないが〉〈とりあえずの判断〉といった印象はなく、話者の自信や慎重さを感じさせる。多くの専門知識を必要とする古美術の鑑定は「まあ」と釣り合いが取れるため、屈折した解釈の入る余地がなく、優越性本来の含意を出すと考えられる。同様の例をあげてみよう。

(50) 確かに難しい案件ですが、これまでの実績から言って、まあ、西川が適任でしょう。

文末が「でしょう」になっているが、この「まあ」にも〈とりあえずの判断〉といった含意は感じられない。感じられるのは自信や判断の重みだと思う。適任者の選定も多くの情報を駆使して判断すべき事象だから、「まあ」とのバランスが取れて優越性の含みがストレートに感じられる。ただし、「まあ」の含意が優越性になるか近似値性になるかの境界は明確ではない。

(51) 原価に諸々の経費を上乗せすれば、売値はまあ、8000円くらいか。

この「まあ」は〈とりあえずの判断〉と解釈することもできるし、専門知識を使ってじっくり考えた上での判断と解釈することもできると思う。(音読すれば、声の調子によってどちらかに決定されるだろう。)ただし、次のように書き換えると、専門知識を使った慎重な判断という可能性はほぼなくなる。

(52) 売値はまあ、8000円くらいか。

12 仮説の有効性(5) 自然会話による検証

この章では再び自然会話の資料を使って出現仮説の妥当性を検証してみたい。本章では文法形式との共起に注目する。自然会話における「まあ」は、どんな文法形式と共起しやすいのだろうか。逆接、順接、挿入、例示との共起を調べたところ、逆接形式とは高い頻度で共起する一方で、順接・挿入・例示と共起する「まあ」は高くても出現総数の10%程度に留まっている。なお、ここでの逆接は意味的な対立ではなく、「けど」などの逆接形式を使っていることを判断基準とし、意味的な対立がなくても逆接形式を使っていればカウントした。「まあ」総数に占める逆接形式との共起割合は次になる(「まあ」の前後いずれかに逆接形式のある数。カッコ内は出現数)。

学生と教師 学生62% (18) 教師33.1% (54)

学生どうし 34.3% (23)

大学講義 22.9% (105)

様々な文法形式の中で、なぜ逆接だけがこれほど高い頻度で共起するのだろうか。アメリカの修辞学者リチャード・ウィーバーの論を参考に逆接の表現効果を考えてみたい。⁽¹⁰⁾

(53) 彼の部屋は、晴れると暑い。曇ると寒い。

(54) 彼の部屋は、晴れると暑い。だが、曇ると寒い。例文から明らかなように、対立する内容であっても逆接を使う必要はない。逆接を使わないと対立関係があまり印象に残らないが、逆接を使うと対立が強調され、逆接の前後(特に後ろ)が印象に残る。逆接を使うのは対立関係を鮮明にして印象に残すためである。この効果は話し言葉でも変わらない。すなわち、会話の中で逆接が現れるのは、それ以前と異なる何か(対立関係に限定されない)を目立つ形で提示したい時、すなわち、それまでとは異なる内容に自信を持っている時となる。これは思考による優越性と重なる。

「まあ」の優越性はそれを得る方向から、社会的優越性、情報の優越性、思考による優越性に分けられた。この内の2つについては、自然会話を使い数量的な検証を行っている。社会的優越性は発話者による「まあ」の数によって、情報の優越性は体験語りにおける「まあ」の数からである。これに対し、思考による優越性の有無は文脈から判断するしかなく、しかも客観的判断が困難というやっかいなものである。だが、逆接形式に注目することで、思考の優越性も数量的な検証が可能になる。逆接形式と思考の優位性が同じような条件で出現することから、逆接形式と共起する「まあ」は思考の優越性によって出現したものと推測できるか

らである。そして、その結果は既に述べた通り、両者の間に高い相関が認められる。これによって、出現仮説の3つの柱全ての妥当性が、自然会話から数量的に検証できたことになる。逆接形式と共起する例をいくつかあげてみたい。

次は学生と教師の会話である。二人は大学の福利施設が増えていることについて話している。

(55) S: でもこの大学はほんとに、なんか設備は
どどんどどん整えてってるじゃないで
すか。

T: まあでもあのう学芸もできたし、学生は、
増えてますよね。

S: そうですね。ほんとうに。

学生のはじめの発話は「でも」に導かれ、学生にしては強い主張になっている。これに対して、「まあでも」で始まる教師の発言は口調は穏やかだが、新しい根拠を示し、より強い反論になっている。思考による優越性を感じることで「まあ」が現れ、その発言を逆接が目立たせていると言える。

次も学生と教師の会話である。院生が主催する院生セミナーが話題になっており、学生は院生セミナーの実行委員長をしている。

(56) T: 私も昨日、つい本当に昨日の晩#、プロ
グラムを見てたんですよ。

S: はい。

T: どんな発表があるのかなあ#と思って、で、
あー多くなってというのが第一印象だったん
だけど。まあ、でも沢山来てくださる方が
いいわけだから。

S: はい。

教師の発言の前半は院生セミナー・プログラムに対する冷ややかな感想であるが、後半では主催する学生の立場に立ってフォローをしている。フォローする発言の頭に「まあ」があり、その前後に逆接がある。フォローする発言はそれまでとは発想の異なる重要な発言だから「まあ」が立ち、印象を強めるために逆接形式があると考えられる。

次も教師と学生の会話である。日本語を教えている教師が、希望とは異なる形で日本語教師になった経緯を語っており、その中で学生が意見(反論)を挟んでいる。なお、学生(院生)は日本語教育専攻である。

(57) T: なぜか日本語、ずっとやることになってしまっ
て。

(中略)

T: あれちょっと違ってる、とか思って。

S: うん#うん#うん#うん。うん。でもそれ
はそれでまあ、あのう楽しいですどね。

日本語教える、ていうのはね。

T: あー

日本語教育専攻の学生が気を使いながら反論しており、そこに「まあ」が出現している。教師とは異なる観点からの反論なので「まあ」があると考えられる。「まあ」の前後に逆接を置いて目立たせる一方、いろいろな表現によって配慮を示している。学生の複雑な気持ちと配慮が見える興味深い発言である。

13 まとめ 「まあ」とは何か

本稿のタイトルには意味が入っているが、ここまで筆者は意味を論じてこなかった。本稿は次のように考えるからである。

(58) 「まあ」は出現条件のみを持ち、意味を持たない語である。

自然会話に意味を確定できる用例がほぼ存在しないこと、「まあ」の主な用法が出現仮説によって説明できることが、このように考える根拠である。出現仮説は次であった。

(29) 「まあ」は優越性を感じた時に出現できる。

そして、優越性は情報・社会的関係・思考の三つの方向から得られる。本稿では第四の方向の可能性を検討していないが、筆者はこれ以外の方向はないと予想している。

では、「まあ」を可能にする優越性とは何だろう。日本語会話は聞き手と話し手による共話だと言われることがある。相槌を打つ、補足する、フィラーを発する、笑う、うなずく、言葉を先取りするといった形で、聞き手が常に反応を示すことが必要だからである。聞き手のこれらの反応は、相手の発話を受け入れている、興味を持って聞いているという記号であり、これがないと話者は不安になり、やがて発話を続けられなくなってしまう。自然会話において発話者は常に不安を抱えており、聞き手からの〈受入反応〉による支えを必要としていると言ってもいいだろう。そして、聞き手が〈受入反応〉を積極的に示すことで、話しやすくなり会話も盛り上がる。だが、時には〈受入反応〉を抑えるべき時、積極的な〈受入反応〉が邪魔になる時がある。例えば、会社内で上司と部下が話す時、部下は〈受入反応〉を控えめにしなくてはならない。部下が頻繁な〈受入反応〉を示してしまうと、馴れ馴れしいと響きを買う危険がある。この時、上司の発話は社会的優越性に支えられている。あるいは、自分の体験を話している時、聞き手が〈受入反応〉をあまり積極的に示してくると、〈俺の体験を知らないくせに、なぜ知っているような態度を取るのか?〉と感じて話し

にくくなる。相手の体験を聞く場合、前半の説明部分では〈受入反応〉を控えめにして大人しく聞き、話が佳境に入ったら笑いなどで〈受入反応〉を大きめに示すことが〈マナー〉ではないだろうか。言うまでもなく、体験の話は情報の優越性に支えられている。

優越性を自覚した時、話し手の不安は軽減し、聞き手の〈受入反応〉を気にせず安心して話せるようになる。そして、安心して話せると感じた瞬間、思わず「まあ」を発してしまうのではないだろうか。思わず漏れてしまう言葉であれば、自然会話の「まあ」の殆どが意味や機能を確定できないことも説明できる。「まあ」の発話時間とピッチを調べた馮(2021)によると、自然会話では長さが30ms以下の聞き取れないほど短い「ま」がしばしば発せられているという。⁽¹¹⁾少なくとも何等かの意味を持たせていれば、聞き取れないほど短くなることはないと思われる。もちろん、この考察は「まあ」元来の姿を推測したもので、意味や効果を意識して使われる「まあ」のあることは本稿で考察してきた通りである。

日本語会話において優越性がどんな意味を持つのか、本稿の短い考察から結論を出すことはできないが、日本語会話では話し手の抱える不安が大きな役割を果たしていると感じられる。配慮表現の多くは、相手に対する配慮以上に自分の不安や緊張が動機になっているし、会話の文体(スタイル)変化にも、不安の強弱が大きくかかわっていると思われる。今後は「まあ」を含めた日本語の会話スタイルについて、できるだけ広い視野から考えていきたい。

本稿の最後に〈とりあえず〉〈だいたい〉といった近似値性の問題を扱っておきたい。2章で考察した通り近似値性は「まあ」の中では変則的な用法で、自然会話ではごく稀にしか登場しない。しかし、母語話者は「まあ」の意味として近似値性を思い浮かべ、辞書にもその意味が必ず載っている。なぜこのような現象が起こるのだろう。「まあ」にはいろいろな使い方があるが、その殆どが意味を説明できない。例えば、「まあ、冗談だけだ。」「まあ、落ち着いて。」などは「まあ」らしい用法と言えるが、その意味は説明困難であり他の言葉に言い換えることもできない。このような中で、近似値性の「まあ」だけは「だいたい」「とりあえず」といった語に置き換え可能である。この分かりやすさから母語話者は「まあ」の代表的用法として近似値性を思い浮かべ、「まあ」の中心的意味だと感じてしまうと考えられる。

(注)

- (1) 収録した自然会話の内訳は以下である：大学生と大学教師の会話(初対面)が約15分×9本、大学生どうし(友人)の会話が約15分×9本、名古屋市内で2007年に収録。大学講義は約90分の文系講義5本、東広島市で2017年に収録。
- (2) 富樫純一(2002)「談話標識「マア」について」、『筑波日本語研究』7。
- (3) 川田拓也(2007)「日本語談話における「マア」の役割と機能について」、『言語学と日本語教育』V。
- (4) 小出慶一(2007)「フィラー化の様相-「マア」の場合」、『埼玉大学紀要』教養学部、43(1)。
- (5) 大工原勇人(2010)「日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究：フィラーの定義と個々の形式の使い分けについて」、神戸大学博士学位論文
- (6) 小出(2007)は近似値性では説明できない「まあ」の存在を認め、「曖昧さのない事柄を表現する際に、「まあ」が現れることも珍しくない。」と述べているが、この事実についての考察はない。
- (7) 川田(2007)は、ヘッジとフィラーの「まあ」について、話し手が談話の中で聞き手と共有していない情報を提供する時に現れると述べている。体験語りの内容は聞き手の知らないことなので、「まあ」は体験語りに現れやすい」という条件は川田(2007)の指摘と一部重なる。
- (8) アンケートは20代から50代の学生と社会人を対象に東広島市内で実施。選択肢は以下の5つである：自然、やや自然、どちらとも言えない、やや不自然、不自然。
- (9) 感動詞用法において「まあ」を「まー」と長く発音すると優越性が弱まり、優越性による制限も弱まる。本稿では「まあ」を伸ばさず二拍で発音する形について考える。
- (10) Richard M. Weaver, *The Ethics of Rhetoric*. Hermagoras press, pp.137-138.
- (11) 馮文彦(2011)「〈研究ノート〉自然会話と大学講義の用例から見るフィラー「マア」の二つの用法-日本語学習者が注意すべき区別-」、中国四国教育学会『教育学研究ジャーナル』第26号。話し手がフィラーを無意識に発している可能性については次の文献にも指摘がある。定延利之(2010)「会話においてフィラーを発すること」、『音声研究』14(3)